『「もう一つの日本」を求めて
――三島由紀夫『豊饒の海』を読み直す』

井上隆史［著］, 2018年, 現代書館.

［評者］
高沼利樹
TAKANUMA Masaki

本書は，日本近・現代文学の研究者である井上隆史氏が，これまでの研究成果を踏まえながら三島由紀夫の『豊饒の海』を「読み直」して作品の考察を深めようとしたものである．またその考察のなかで，近代から現代までの日本の社会状況への言及も試みられている．本書は序章，終章を含めて全５章で構成されており，序章では『豊饒の海』を今「読み直す」べき背景が説明され，1，2，3章では『豊饒の海』全4作が実際に「読み直」され，終章でここまでの内容がまとめられる．

三島由紀夫の遺作『豊饒の海』は，これまで多くの論者によって読み直されてきた．その最も大きな理由は，この作品の遺作という性質がある事情によって異様に強められていることであろう．むろんその事情とは，作品の擱筆日が三島事件の日と同じだということに他ならない．ドナルド・キーンの証言によれば，擱筆日は事件の日に合わせて偽装されたらしい．この行為の不自然さもあって，この作品は単なる遺作としてというよりも，三島の人生を締めくくる遺言として読み直されることが多かった．

そのような状況の中で，本書は『豊饒の海』を三島の死からやや離れたところで論じようとしている．三島の死がある種の「呪縛」（p.6）として作用してこの作品の読解を狭めてきたと考えたとき，本書の意義はすぐさま浮かび上がってくるだろう．しかしだからといって，本書ではテクスト論的な読みがなされるわけでもない．著者は三島の死以外の参照項を用いて，『豊饒の海』に新たな意義を見出すことを試みているのである．

ここで作品と新たに結びつけられているのは，時代である．当然重点が置かれるのは，三島の生きた昭和日本の時代性となる．しかし，読解の視野は日本の昭和という一地点に留まることはなく，縦横に広がっていく．日本の昭和以前から続く近代という時代や，以後に続く現代という時代について言及されることもあれば，バルザックやプルーストといった世界の文学が引き合いに出されることもあるのだ．

このような読解の型があることを踏まえて，著者の主張をひとまずまとめてみたい．『豊饒の海』には日本の近代社会が抱える問題がいち早く示

されており，その問題は現代においても，場合によっては世界規模で，未だ解決されないものであるため，この作品は現代の読者に読み直される必要がある．本書の中心にある主張はこのように概括できるだろう．

本書がユニークなのは，その主張の展開を，第3巻『暁の寺』の読解から始めている点だ．著者は『暁の寺』においてこそ，近代という時代に対する三島の反応が見出せるとする．本作は全4巻の中で失敗作とされることが多いが，本書では半ば擁護されながら読み直される．

著者によれば，『暁の寺』は前の２巻との「脈絡が切断」されて，『豊饒の海』全4巻のうちで最も「読み辛い」作品である（p.18）．しかし，著者は三島の創作ノートなどを参照しながら，むしろその「読みにくさ」にこそこの作品の意義があると述べる（p.19）．この作品の「読みにくさ」は三島が「何も起こらぬといふこと」を意識したことによって生まれたもので，ここに近代社会への問題提起が潜んでいたと言うのだ（p.26）．

著者は，『暁の寺』が執筆された時期の社会の雰囲気に着目して，一般の人々がポジティブに受け取っていた社会状況の裏に，実はネガティブな性質が伏在していたとする．連載が開始された1960年代後半は高度経済成長が成熟した頃で，学生運動もまだ激しく，人々は社会に活発な雰囲気を感じ取っていた．しかしその雰囲気は，経済においても運動においてもその後急速に衰えてしまって，人々は発展や変革の夢が泡沫のものであったことを痛感する．戦後復興期の活発な雰囲気が「偽りの虚像」（p.28）に過ぎないものであったこと，このことを三島は「何も起こらぬといふこと」というテーマを取り上げることで言い当てていた．作品の「読みにくさ」や脈絡の「切断」は，時代が抱えていた問題を反映したことで生まれた．これが著者の考えだ．

上記のような「読み直」しに続けて，著者は，『暁の寺』が社会に提起した問題が時代的な厚みを持つものとして描かれたことを評価する．主人公の本多は，明治維新直後から続く裁判に弁護士として関わっていたが，敗戦と新憲法の施行によって争いが形骸化したことであっさりと勝ちを収め，莫大な財産を手にする．しかしその財産は，結果的に「覗き」の場を作ることにしか使われない．財産が僥倖のように手に入ること，そしてそれが愚かな行為しか生み出さないこと，ここに著者は「痛烈なアイロニー」を見る（p.41）．著者はこういった資本主義経済的「アイロニー」が明治期に端を発することを重要視しているのだ．

このような「読み直」しはあくまで一例に過ぎない．著者は『豊饒の海』の他の巻も，近代や現代といった時代と結びつけて考えていく．ここで詳細に述べることはできないが，第1巻『春の雪』では「純愛」と「性愛」の問題（pp.108-9），第2巻『奔馬』では「ミスティックな国学思想」

(p.113) や「金本位制」(p.114) を成り立たせる文化や社会の構造，第4巻『天人五衰』では「アイロニー」や「擬制」が突き進んだ「虚無の極北」(p.182, p.218他) が時代性と結びつけて考えられている．

全巻それぞれへの言及を通して，著者の主張のところどころに大小の飛躍が認められないでもない．しかしその手続きは，創作ノートの精緻な読み込みや，連載作品である『豊饒の海』の執筆時期と一日単位で対応する形での作品外資料との照らし合わせ，作中のテーマに関する文学史上の系譜の参照などを通じて行われており，一定以上の説得力を獲得しているように見える．こう言ってよければ，飛躍の両岸の足場は安定しているように見えるのである．

いずれにせよ，本書で述べられる論考が野心的なものであることはだれしも認めるところだろう．作品と時代とを結びつけ，ときに飛躍をも伴う柔軟な考察によって，著者は作品と時代それぞれについての新しい知見を生み出すことに見事に成功している．

しかしその柔軟な考察が，論の展開の中でどことなく強張っているように見えることもある．たとえば著者は2016年のメキシコやタイの観光事情に触れて，三島が「時代の本質と，その行く末を見抜いていた」(p.84) と述べたり，日本のバブル景気における土地価格の高騰を作品が「予示していた」(p.170) と述べたり，2004年にボードリヤールが『透き通った悪』で述べたことを三島が「先立って見抜」いていた (pp.180-1) と述べたりする．しかし，『豊饒の海』を予言として見るかのようなそれらの連結に対して，やや唐突な印象を受けてしまう読者は少なくないだろう．また，三島が「見抜いていた」近代の問題が性質を変えながら現代まで解決されずにきた，あるいは悪化してしまったと言うことはできても，三島が死後のことまでを「見抜いていた」と言えるかどうかにも疑問が残る．ここではアナクロニズムが混入してしまっているか，あるいは表現が誇張され過ぎてしまっているのではないだろうか．

当然，これに関しては著者の意図的な部分もあった．本書の「あとがき」で著者は，「世界の思想，文学の広い地平において議論を展開するために，必要と思えばいつでも視野を拡大」(p.237) するとともに，「これまでの三島研究において真剣に考えることが先送りされてきた領域にも，あえて踏み込んでいった」(同上) と述べる．飛躍や誇張があったとしても，それらはおそらく筆者が「必要と思」ったことで生まれたものだった．過度になされたように見える部分はあっても，むしろこの大胆な態度こそが，本書の意義を際立たせているのである．

Copyright © The Comparative Civilizations Society of Rikkyo University